

## 「なぜ世界は存在しないのか」

マルクス=ガブリエル：著

### II 存在するとはどのようなことか (P75～106)

単元レポート担当：白鳥

(P76)

この章では、**意味の場** について考える。

意味の場こそが存在論的な基本単位である。

何かが現れてくる場が意味の場である。

何かが意味の場に現れているという状態、それが存在するということである。

サイが存在している ⇔ サイが草原という意味の場に属している

(P77)

存在論とは

…存在するとはどういうことなのか、「存在」という言葉は何を意味しているのかという問いに対して、体系的に答えようとする理論。

形而上学とは

…世界とは何なのか、「世界」という言葉は何を意味しているのかという問いに対して、体系的に答えようとする理論。

体系的でなければならないとは、提示したり根拠づけられたりする考えのプロセスやセンテンスが、理論をなしていなければならないということ。

わたしたちの経験する現実との接触を存在論は保っていなければならない。

説明したいと思っているのは、何かが存在するとはどういうことなのかということなのに、それが存在していることを認めないような説明に陥ったとしたら、何かが間違っていると考えるべきである。

(P78)

どんな対象にも、それぞれ特定の性質がある。それぞれの性質が、それぞれの対象の物理的・感情的・論理的な状態を特徴づけ、それによってそれぞれの対象をほかの対象から区別している。(愛犬ハヴェルと、アフリカのどっかに居るライオン、レオの例示)

(P79)

(著者の考察の中心をなす、二つの哲学的な問い)

- 1 およそ存在するいっさいの性質を備えた対象は、存在しうるのか。
- 2 どの対象も、ほかのすべての対象から区別されるのか。

二つの問いに対する著者の答えは「否」。

→ ここから導き出されることになるのが、世界は存在しないという結論とのこと。

(なぜならば…)

第一に、世界とは、いっさいの性質を備えた対象であるはずだから。

第二に、世界の中では、どの対象も、ほかのすべての対象から区別されるはずだから。

(P80)

(第一の問いについての考察)

### 超対象

対象とは、真偽に関わりうる思考によって考えることができるもののこと。

↳ 真であったり偽であったりするところの思考という意。

真偽に関わりうる思考ではない (真でも偽でもない) ものの例として、

「で？」 「グルメル、グルメル」といった言葉を例示。

真偽に関わりうる思考の例として、

「ルクセンブルクには大量殺戮兵器がある。」

「今、ロンドンでは雨が降っている。」(検証可能)

「宇宙にある銀河の数は、300年前は奇数だった。」(検証困難か不可能)等を例示。

(P82)

人間が検証できる思考は、対象全体に比べればずっと狭い範囲。

検証可能なのは、全体の中でもわずかに光が当たった狭い領域のみ。

ハイデガーはこれを「明るみ」と言い表した。

人間の認識できるものは、全体から見れば、ないも同然なほどわずかである。

存在とは、ほかの全ての対象から自分を際立たせている性質。

しかし、人間はそのすべてを知ることはできない。

認識とは、その性質の一つを、人間が可能なものだけ捉えているにすぎない。

(P83)

およそありうる性質のすべてを備えた対象を、**超対象**と呼ぶことにする。

しかし、ありうる性質のすべてを備えていたら、自身をほかのさまざまな対象から際立たせることができないため、存在することができない。

(P84)

### 一元論・二元論・多元論

超対象が存在するという観念 ⇒ プロブジェクティヴィズム

たったひとつの領域に、すべての性質が包括される。

この対象領域それ自体がひとつの対象である。

このたったひとつの領域をすべての対象の担い手と見なすのであれば、それによって超対象が導入されたことになる。

哲学では、性質の担い手を **実体** と呼ぶ。

(P85)

3人の偉大な形而上学者（デカルト・ライプニッツ・スピノザ）によるテーゼ

1 一元論（スピノザ） たったひとつの実体、すなわち超対象だけが存在する。

2 二元論（デカルト） 二つの実体が存在する。

考える実体（*substantia cogitans*）と物質的な延長実体（*substantia extensa*）

3 多元論（ライプニッツ） 数多くの実体が存在する。

実体（モナド）は、ほかのすべての実体から完全に独立し、最大限に自立した対象であって、有限な数の特定の性質を備えている。

著者の立場は、多元論。

(P86)

本当はいくつの実体が存在しているのか。

個々の対象の多くは、さらに別な個々の対象でできている。

メレオロギー（ギリシア語メロスは「部分」という意味）

ハンドバッグとワニ 右手と左手 コードレス電話の親機と子機

国家に対するハワイ州とヘリゴランド島 … などの例示

親機と子機は、メレオロギー的な合成をなすことで、ひとつの全体としての第三の別個の対象、この場合はコードレス電話になっている。（「親機+子機=コードレス電話」）

しかし、自分の左手で子機をとっても、メレオロギー的な合成はなしていない。（「左手+子機=?」）ということで、どんな対象でも手当たり次第に結びつければ、必ず一つの新たな複合的对象ができるわけではない。

(P89)

超対象は存在するのか。

もし、存在するとしたら、超対象とは、すべての性質のメレオロジー的な合成であることになる。そのような合成には、ありとあらゆる性質が含まれるはず。

それならば、そこにどんな性質が含まれるのか、それが本当にメレオロジー的な合成なのかといった判断をする基準など、どうでもよくなる。

何の基準もなしに任意の性質を認めさえすれば、それだけで何ごとかを経験できる対象などというものは、明らかに奇妙。私の左手とメルケルの愛読書とカリーヴルストでもあり、そのほかいっさいのものである、こんな主張が真となるような対象を探求するというのは、異常な研究計画。

(P90)

従って、たったひとつの実体、すなわちすべての性質を備えた超対象だけが存在するというのは、間違っている。つまり一元論は間違っている。二元論は真偽に関わりうるものではあるが、まったく根拠づけを欠いている。そこで、単純な消去法によって、多元論だけが残ることになる。(現代に合わせたアップデートは必要だが)

(P91)

(第二の問いについての考察)

絶対的区別と相対的区別

どの対象も、ほかのすべての対象から区別されるのか。

(P92)

一見すると、そのようなことが成立しそうにも思えるが、完全に間違っているし、陥穽でもある。

「対象G」の例

Gを知る人に、「それは〇〇か」と尋ね、「Gはそれではない」と否定されるだけの対応をされたとする。G以外のすべての例を挙げたとして、教えてくれたのは「Gはそれではない」ということだけだったとしたら、Gはほかの対象すべてから区別されたが、Gはほかの何ものでもないということだけが分かっただけで、その対象の具体的な本質については何も分からない。ただ、否定的・消極的にだけ規定されているだけ。わたしたちは、Gについて何も積極的なことを知らない。Gが何なのかを知りたければ、Gが何ではないかということ以外のことを知らなければならない。

したがって、Gの自己同一性とは、ほかのすべての対象とGとの区別と同じことではない。Gは、ほかのすべての対象との区別以上の内容をもつ何らかの固有な性質を備えていなければならない。

(P93)

とはいえ、対象の同一性を確定するのに、ほかの対象との区別にまず着眼するのは、決して不適切なことではない。大切なのは、そこでは絶対的区別が問題になっているのではないということ。

**絶対的区別**とは、ある対象とほかのすべての対象との区別。

絶対的区別には情報的価値がない。絶対的区別が意味しているのは、ある対象がほかのいかなる対象とも違うということ。そのこと自体には、内容的な情報は何も含まれていない。対象を区別するには、内容的な情報に即した基準がなければならない。

ある対象を、他の対象から区別するのは何なのか。それを知るには、当の対象についての知識・情報がなければならない。したがって、情報的価値のない区別は、そもそも区別ではない。

**絶対的区別**（情報的価値のない無意味な区別）と**相対的区別**（ある対象とほかのいくつかの対象との区別）を区別する必要がある。

(P94)

相対的区別は、対照関係の情報によって得られる。

(コカ・コーラの例)

コカ・コーラ ⇔ ペプシ、ビール、ワイン、アイスクャンディ（対照関係あり）

コカ・コーラ ⇒ サイ（対照関係なし）

「コカ・コーラをもう一本ください。コカ・コーラがなければ、サイをください」などと言う人はいない。

サイについても、サイは世界のなかにある当のサイ以外のすべてと対照関係にあるのではないか。当のサイ以外のすべてからサイを浮き立たせ、はっきりと区別しているのではないか、と問うてみよ。しかし、いろいろな理由からそうではない(そういう問い立てはできない)。わたしたちは、すでに何らかの状況—たとえば動物園やテレビ番組—のなかにサイを位置づけているからである。どんな状況にも依存せずにサイのことを考えることはできない。

ジャック・デリダ「テキストの外部など存在しない」

サイはつねに何らかの状況のなかで現れてくる。

サイであれ、ほかの何であれ、コンテキストのそとに存在するのではない。

(P95)

いかなる状況も、何らかの状況のなかに現れてくる。絶対的区別を立てようとする、さらに大きな対照関係をいつでも想定せざるを得ない。それは結局のところ、何も認識できないのと同じで、人間による認識の限界を告げる事実である。

絶対的区別は存在しない。

いくつかのものはほかのいくつかのものから区別される。しかし、すべてのものがほかのすべてのものから区別されるということはありません。

(P96)

二つの別々の対象ないし事実が、どうして同一だとされるのだろうか。(河の流れの例)  
対象は、つねにほかのいくつかの対象から区別される。対照関係のクラスは、いつでも相対的なものでしかない。絶対的な対照関係のクラスは、決して存在しない。

(P97)

### 意味の場

たったひとつの世界なるものなど存在せず、むしろ無限に数多くのもろもろの世界だけが存在している。それらもろもろの世界は、いかなる観点でも部分的には独立しているし、また部分的には重なりあうこともある。

世界とは、すべての領域の領域のこと。存在するとは、世界のなかに現れているということ。何ものであれ世界のなかに現れるためには、何らかの領域のなかに現れなければならない。

存在すること＝世界のなかに現れること

存在すること＝何らかの意味の場のなかに現れること

### 意味の場の存在論の原則

何かが現象している意味の場が存在しているかぎり、何も存在しないということはなく、そこに現象している何かが存在している。

(P98)

現象とは、「現れ」「出来事」「存在」を表わす一般的な名称。

「出来事」は具体的・物質的だが、「現象」はより融通がきく概念。

注意すべきは、論理的な偽であっても現象はしている（したがって存在はしている）ということ。そのことは、決して当の論理的な偽が正しいとか真であるといったことを意味しない。現象／存在は、正しい・真であることと同じではない。（「北欧に魔女がいる」という命題の例示）

(P99)

意味の場は、曖昧であったり、多彩であったり相対的に規定不足であったりする。捉えどころなく多彩な表情をもつ現象や、両価値的な現象も含まれる。

(その理解の助けになってくれるのが)論理学者ゴットロープ・フレーゲによる対象領域の概念規定。

ただし、現代の論理学（対象領域は、互いにはっきり区別された多数の加算的な対象と考えている）は、かなり間違っただ存在概念を代表している。

（「存在は常に加算的」という考え方をしているが、それは間違いだということ。→馬の例示、「いくつ存在するか」という問いと「存在するかどうか」という問いの区別を考えれば、間違いは明らか。）

現代の論理学は、対象領域を、ほとんど完全に集合概念と融合させてしまった。

(P100)

すべての領域が、数学的に記述できる加算的な対象の集合であるわけではない。芸術作品や複雑な感情には、そのようなことは当てはまらない。

意味の場のほうが、より一般的な概念。

フレーゲの論文「意味(ジン)と意義(ペドイトウング)について」

→いかにして同一性命題が実質的内容を備え、かつ無矛盾でありうるか、という論文

(P101)

(同一性命題の例示)

ニューヨークのヘラクレスは、第三十九代カリフォルニア州知事と同一である。

(アーノルド・シュワルツェネッガーのことを意味している)

$2 + 2 = 3 + 1$  ( $2 + 2$ や $3 + 1$ を「与えられ方」「意味(ジン)」と呼ぶ)

(これが意味しているものが数字の4)

同一性命題で等置される二つ(以上)の表現それぞれの「意味(ジン)」は異なっているが、それらの異なった表現が指し示している当のものは同一である。同一性命題が実質的内容を備え、真であるとともに無矛盾であるとき、そこからわかるのは、同じもの(同じ人物、同じ事実)がさまざまに異なった仕方で表されうるということである。

フレーゲが用いる「与えられ方」という言葉の代わりに、わたしたちは「現象」という言葉を用いる。

意味とは対象が現象する仕方のことであると定義することができる。

(P102)

意味の場とは、何らかのもの、つまりもろもろの特定の対象が、何らかの特定の仕方で現象してくる領域。対象領域においては、この点が捨象される。

(左手の例示) 意味の場の違いによって、同じものがひとつの手でもあれば原子の束(素粒子の集積)でもあり、芸術作品でもあれば(昼食を口に運ぶ)道具でもある。

(P103)

意味の場の外部には、対象も事実も存在しない。存在するものは、すべて何らかの意味の場のなかに現象する。

「存在する」とは、何らかの意味の場のなかに現象するということ。

無限に多くのものが、何らかの意味の場に現象する。そのさい、誰かがそれに気づいていたかどうかは関係ない。存在論的な観点からすれば、それを人間が経験するかどうかには、副次的な役割しかない。ものや対象は、わたしたちにたいして現象するからこそ現象しているわけではないし、わたしたちに気づかれているからこそ存在しているわけでもない。ほとんどのものは、たんにわたしたちには気づかれずに現象している。

(P104)

(「ファウスト」で語らせた学士の言葉が例示されている)

→ カントの構築主義に対するゲーテの腹立ちを表現。

(P105)

わたしたちは宇宙における自身の重要性を過大評価している。宇宙が人類の存続に配慮してくれているように思っている。しかし、宇宙にせよ時空にせよ、わたしたちのような存在者がこの美しい惑星上に存在することには、何の関心ももっていない。存在するかどうか、私たちが自身の存在を誇りに思っていることも、世界全体を見ればほとんどどうでもよいことである。

しかし、人間が存在するかどうかなどは大きな全体においてはほとんどどうでもよいという事実から、それがあなたとわたしにとってもどうでもよいということが導き出されるわけではない。

存在するものは、すべて意味の場に現象する。存在とは、意味の場の性質にほかならない。つまり、その意味の場に何かが現象しているということにほかならない。

(P106)

意味の場もまた対象である。意味の場についても、真偽に関わりうる思考によって考えることができるからだ。そこに何かが現象しているということ、これが意味の場の性質だとすると、やはり存在は対象の性質であるということになるのではないか。だが、意味の場もやはり意味の場の中に現象する(さもなければ存在するとは言えない)となると、これは矛盾しているのではないか。

しかし、そのような矛盾は生じない。それは — 逆説的にも — そもそも世界が存在しないからだ。存在しているのは、無限に数多くの意味の場だけである。

それらの意味の場は、ある部分では重なりあうが、別の部分ではどんな仕方でもけっして接し合うことがない。結局のところすべてはどこでもないところで生じる。無限に数多くのことが同時に起こっている。しかし、わたしたちは無限に数多くのことに同時に取り組むことなどできない。